

考証その9 ^{かんばん}看禰のこと

地区で異なる呼び名はよ～けあります。

半田のおおかたの地区では`法被^{ほっぴ}、と呼ばれますが、

上半田には`看禰、の呼び名が遺ります。

亀崎さんではこれが真っ当な呼び名・・・ソウルを感じますね～。

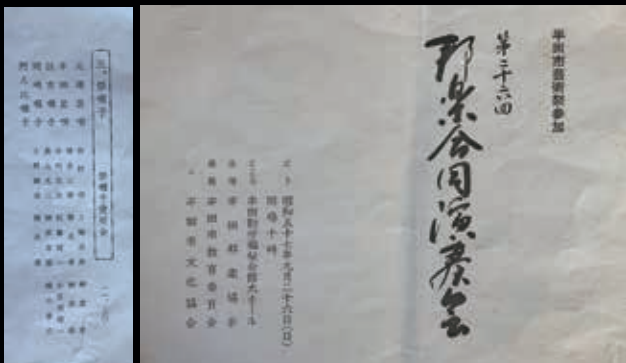
ただし、上半田でそう呼ぶ人は、ずいぶん少なくなりました。



はんだ山車まつりを終えて尚反響が大きく、市の賓客用お土産として和紙に似た「揉み紙」に印刷しました。以降、あちこちの祭で似たポスターが現れました。

看禰にまつわる思い出をふたつ・・・

まだ自分が小学生の頃、愛知県勤労福祉会館→現在のアイプラザで邦楽演奏会が定期にあり、何年か続けて北組は囃子を披露しました。団体名は`上半田北組 祭囃子愛好会。普通は保存会とするのを、より想いを込めて`愛好会となりました。せっかくだから、と当時の指導者のおっちゃんらから、揃いの装束を新調しようと声が掛かりましたが、なんせまだ小学生ですからそんなお金はありません。保護者へのお願いが手紙で出され、家に持ち帰りました。`カンバン、の文字はそのとき初めて目にしましたね。



ちょうどその頃`半田盆唄、という新しい盆踊りが発表され、歌手の八代亜紀さんが唄いました。その披露会を当時の市民ホールで開催、北組が前座で囃子を披露する為に半田盆唄を囃子で出来るように猛特訓し、舞台上に臨みました。確かおっくるまに吊るす大太鼓を真ん中に据え、左右に長胴太鼓を二丁ずつの四丁。小太鼓を五丁・・・あんなに太鼓を並べた舞台は後にも先にも無かったなあ～。

裏話・・・本物の八代亜紀に一目会えるかもと思い、皆で控え室を覗いたのですが、全然違う人だったのでがっかり。`ニセ者だぎゃ～!、とみんなで大騒ぎしました。

もうひとつは、第四回 はんだ山車まつりで初めて公式ポスターをデザインしました。生意気にも写真探しから始めるデザインに疑問を持ち始めていた自分は、写真に頼らず、無謀にも31組の看禰を平らに描きなぞり、均等に

散りばめました。手間もかかるしずいぶん斬新な手法でしたが、当時の役所内では反発の声が多く、その理由が「山車が載っとらんじゃないか」・・・ま～ごもつとも。でも当時のご担当(元市長)のご推挙のおかげで、採用に至りました。その後の反響はとて大きく、市内外から商工課へ問合せがあり、スタッフが大量のポスターを筒に丸めて全国発送に追われる場面がよく見られましたね。

公式ポスターが新聞発表された時もやっぱり名前は`法被のポスター、でした。自分としては違和感大きかったのですが、役所からは「看禰じゃあ判からんよ・・・」それが現実でしたね～。

漢字をバラしてみると、`看、はストレートに`見る、意味には手をかざして見る、とありますが・・・確かに目の上に手をかざした文字の姿!判りやすいですね。昔、デザインにこれを応用した事があり、13年前の半田常滑看護専門学校ロゴマーク候補案でした。

 半田常滑
看護専門学校
HANDA TOKONAME NURSING COLLEGE

因みに採用案はこちら・・・

他にも数案提示したのですが、H・T・N・Sを図形で組み合わせ、パッと見では読めそうで読めない仕掛け。

学校の紋章としては随分斬新なテイストを盛り込んだのでつきり不採用かと。もしや若い学生さんらの意見を汲んで決めたのかなあ? 以来、未永く愛されています。





次は`裵、・・・意味は汗取りの肌着。和装の襦裵にもありますが、法被の別名`裵纏、にもあり、地方によっては通称では無い事が分かりました。

お祭り文化で調べると・・・関東圏が`裵纏、関西圏では`法被、が一般的。`上方の法被、江戸の裵纏、とも言われる由縁でしょう。法被は昔からあり、裵纏はとあるきっかけで江戸の庶民文化に生まれたようで、火消し・お祭り・仕事着として着た裵纏しるしばんてんを印裵纏と呼びますね。

いろんな文献を調べてみました。

法被・・・背中に家紋を大きく染め抜いたもので、襟を外側に返しました。今では見られませんが、本来の法被は胸紐ひとえつきの単でした。江戸時代、一般庶民に羽織禁止令 いわゆる儉約令(贅沢はだめ)が出た為、襟を返さないまま普及しました。

形の違いをまとめました。

- ・法被・・・丈が長い(尻まで)、脇が空まちく襜がある。広い裾、袖が長い、胸紐がある、襟を返す。
- ・裵纏・・・丈が短い(尻の上)、脇に襜がない、袖が短く袖口が小さい、胸紐がない、襟を返さない。

法被の原型は能の男装束、武家の装束などに見られますが、現在に残る法被は職人や旅館や商家の使用人でお揃いの紋をいれた上っ張りが典型的な法被です。

一方、裵纏は江戸時代に儉約令が出て、庶民に法被を着る事が禁止されました。その後、江戸の庶民が火消し組のお揃いの上っ張りとして生まれました。なので、江戸では武士と僧侶、お金持ちに法被が限定され、庶民には裵纏が広まりました。一方、上方は法被が生き残り、地域的な違いが生まれました。しかし現在では、裵纏も法被も区別がなくなりつつあります。

つまり、現代ではハンテンとハッピは混同されています。

【法被の源流】

江戸時代に武家社会から誕生しました。

背中に大きく家紋を染め抜き、その家の代表として襟を返して着ました。別注羽織着物の簡略版なので、胸紐付きの単衣に仕立てます。

【裵纏の源流】

江戸中期の逼迫した財政状況の中、一般庶民に対し名前入れ羽織の禁止例が出ました。そのため襟を返す羽織や法被は上流層に限られ、襟を返さなくても着れる誂え裵纏が庶民の間に普及します。1反の反物で2着作れる事から`半反モノ、といわれ、それが転じて半纏と呼ばれました。また、身の半分(腰くらい)まで纏まとうという意味で`半纏、と呼ぶという説もあります。

【印裵纏の流行】

羽織が別注法被に略され、法被がさらに誂え裵纏として簡略化しますが、江戸庶民は皆自分の裵纏・法被の背中に屋号を染め抜いて`粋、を根付かせました。職人や火消しが着る印裵纏は、今の作業着や別注ユニフォームであり、下町ではそれを着る姿は憧れの的となりました。

【裵纏と法被の違い】

羽織と法被では襟と袖が異なる。襟を折り返すのが羽織で返さないのが法被。羽織の袖は袂袖たもとそでとなり、法被はつつそで筒袖と違いがはっきりしている。しかし江戸時代末期から、区別はなくなりました。江戸時代に一般庶民に羽織禁止令が出たため、襟を返す羽織や法被の代わりに、襟を返さないで着用する法被が庶民の間で普及しました。これを境に、法被と裵纏の混同が始まったようです。

なんだか難しいんですね～。

でも考証としては調べ切れませんでした。



さて、話を「看絆」に戻しましょう。この呼び名はやっぱり特異なのか?と思っていたのですが・・・仕事柄、日本全国の業者さんにご縁があり、東北の大震災で大きな被害に遭われた染物屋のおかみさんとの商談にたまたま「カンバン」の呼び名が聴け、とっても驚きました。

紀 東北地方でもカンバンの呼び方があるのですか?

染 ありますよ。一般的には漁師さんが大漁した時、船主さんが年末とかに配った長絆纏、万祝をカンバンと呼んでいました。でもこの風習は戦前までで今はもうありません。現存するカンバンも、かなり少なくなっています。

紀 どの辺の地域までだったのですか?

染 銚子付近から岩手県宮古付近まで多く見られました。万祝は着物仕立てで奥行きが付きます。最近ほとんど絆纏と呼んでますが、年配の方だと少し長めの絆纏を、まだ「カンバン」と呼んで、注文に来られる事がありますね。

以下、東北の沿岸に遺る文献を調べました。

万祝とは、大漁の際、祝いの引出物として出された漁師たちの晴れ着の事です。幸運にも思わぬ大漁があると、船主や網主などは、船子や網子などを集め、その労をねぎらって祝いの席を設けました。もともとは、この祝宴の事をマンイワイ、マイワイなどと称していましたが、この席上で揃いの半纏や反物を引出物として出すようになり、やがてそれが慣習化すると、この祝い着そのものの事をマイワイと呼ぶようになりました。当初は、万祝と書くほか、間祝舞祝・真祝などと表記される事もありました。そして、これを着て近場の社寺などに揃って参詣し、大漁感謝、航海安全などを祈りました。万祝が盛行したのは、特に地曳網漁を中心とする九十九里浜の網元たちが、競って派手な大漁祝いを行った事が影響しています。文化・文政期(1804～30)頃より房総半島一帯から各地に広まったとき

れ、東京・神奈川・伊豆諸島のほか、茨城や福島、宮城、北海道などの沿岸部に分布がみら

れます。茨城県より北の地域では、船主の家紋や屋号が入っている事から、カンバンと呼んでいました。房総で万祝の製作に携わった紺屋は、万紺屋と呼ばれ、通常は分業で行うものを、注文取りから型紙彫り、染め、販売に至るまで、すべてを行っていた事が大きな特徴です。崎浜大漁唄込みはその昔、帆を操り櫓を頼りに漁に出ていた時代から現代に伝えられているもので、300年を超える歴史があると言われております。通信手段の無かった昔は、陸で待つ家族の元へ大漁の喜びを、いち早く知らせるための連絡手段でもありました。

唄い手が身に纏っている着物は、大漁看絆と申しまして、大漁の際に網元から頂戴したご褒美で、言うなれば海の男の勲章でもあります。海の男の心意気は大漁看絆に染み付いており、海の男の浪漫は唄の中にしっかりと息づいています。それは海を愛し、海に感謝し、海に捧げる讃歌であり、豊饒の海から港入りする、漁師の凱旋歌なのです。網元の屋号や、縁起のよい鶴亀の絵柄も鮮やかに染め抜かれた長半纏を、気仙沼では「大漁看絆」と呼んできました。唐桑には今も、明治43年に作られた看絆が2着保存されています。当地方では最古の大漁看絆として、鮪立古館家と崎浜吉田家に大切に保管されています。

なるほど・・・気仙沼も半田も海に面した町。江戸の文化が海路を経て直輸入出来たのなら、その中には意匠や呼び名も持ち帰れたのではないのでしょうか。

カンバンは漁師の凱旋歌。